| 開催地名：京都府京丹後市 | |
|---|---|
| 開催日時 | 令和 3 年 11 月 25 日（木）　19:00～20:00 |
| 開催場所 | 京丹後市峰山総合福祉センター |
| 語り部 | 大内幸子　　（宮城県仙台市） |
| 参加者 | 自治会・自主防災組織役員、市職員　約 100 名 |
| 開催経緯 | ・本市は、昭和 2 年 3 月 7 日に起こったマグニチュード 7.3 の北丹後地震で、約 3,000 人の犠牲者を出した経験がある。しかしながら、地震発生から 90 年が過ぎ、当時の惨劇を知る者はほとんどいない。<br>・防災訓練において、避難所の開設訓練は行ってきているものの、大規模災害の発生を想定した長期間における避難所運営等の訓練は行っておらず、避難所での生活の備えや運営のためのノウハウに乏しい。 |
| 内容 | （1）福住町における自主防災組織発足の経緯<br>福住町は二つの川に挟まれた町であり、水害に見舞われることが多い土地である。特に、昭和 61 年の台風 10 号による被害は甚大で、その当時の苦い思い出が 2003 年の自主防災組織発足につながった。それが今日の「福住町方式」となっている。<br>私たちが数々の災害を経験して、何よりも必要だと感じたのは「住民の安全確認のための名簿」である。そのため、2003 年にはまず、要支援者および住民全員の名簿作成を行った。この名簿は現在でも、年一回の防災訓練のたびに更新を続けている。名簿とともに、わかりやすい防災マップ作成、さらには近隣市町村を中心に「災害時相互協力協定」を結んだ。この協定は、大災害が発生した場合にお互いに助け合うことを目的としたものだ。これは、災害時に起きたボランティアとのトラブルから教訓を得た活動である。災害の被害が大きければ大きいほど、外部から救援の手が入るのは遅くなってしまう。だからこそ、いざというときは自分たちの手で対処しなければならない。<br><br>（2）東日本大震災時の記憶<br>福住町は津波による直接の被害こそなかったが、堤防は所々崩れ、家の中はどこもめちゃくちゃになった。安否確認を実施後、避難所開設を始めた際に、まず作ったのはトイレとゴミ置き場である。併せて、炊き出しの準備も行った。日頃の訓練の成果が出て、暗くなる前にこれらの準備を終えることができた。<br>福住町は 1500 名程度の小さな町であり、災害時の収容施設も、備蓄品も |

| | |
|---|---|
| | そこまで多くはない。しかし、東日本大震災当時は、周辺市の帰宅困難者、および津波から逃げてきた人々が福住町へ殺到した。500 人収容予定の施設に 2000 人が詰まっていた。支援が必要な人、赤ちゃんや妊婦さんなど、手厚いケアが必要な人は小学校等の避難所から集会所へと誘導した。実際、避難してくる人の約 8 割は支援が必要な災害弱者と呼ばれる方々である。当時の避難所運営時に、女性による細やかな対応の重要性を感じた。だが、避難所運営マニュアルに女性の参画はなかった。この経験から、私は研修を受けて、女性防災リーダーを目指すようになった。<br><br>（3）その後の地域防災活動<br>福住町の防災訓練は、「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに行われる。普通なら消防の人に来ていただいて教えてもらうかたちだと思うが、私たちは 15 年前に役員へ教えてもらって以降、自分たちだけで訓練を行っている。災害の規模が大きければ大きいほど、警察や消防は対応に駆り出されていなくなるからだ。自分たちでやることが重要である。もしもの際にトップがいなくても問題がないようにする。それが福住町方式である。<br>災害時に行政に頼りたい気持ちはわかる。だが、行政も被災するので、普段から訓練して備えておくこと。そして、防災は日常生活そのもの。様々なイベントや活動があって、防災の取り組みが活性化する。備えて、知識を得て、訓練をする。そして、忘れないこと。これが命を助けることにつながっていく。<br> |
| 開催地より | 女性の参画が少ないとお嘆きであったが、参加をお願いしても断られてしまう。どうすれば女性の方に参画していただけるか、是非ご教示いただきたいと感じた。また講演の内容としては、我々の地域でも取り組めている内容が多くあった。 |